

氏名	葉 翠馨
ヨミガナ	ヨウ スイカ
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第504号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 水干鞍伝統技法研究 一馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」模作を通して— 〈作品〉 馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」模造制作研究

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	三田村 有純
（論文第1副査）	グローバルサポートセンター	特任教授		井谷 善恵
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小椋 範彦
（副査）	大学美術館	教授		原田 一敏
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	片山 まび

（論文内容の要旨）

はじめに

本稿では、日本馬具の中で最も重要であり、代表的な鞍の一つである水干鞍の中でも他には見られない独特な作風とデザインを持つ優れた作品である馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」の再現制作を通して、大和鞍の形式だけではなく、大和鞍の源流としてアジア大陸との関連性を探り、日本鞍の初期から全盛期までの発展過程や水干鞍を出現との影響を考察する。さらに水干鞍の伝統技法と鞍橋の結び方を考察し、その構成する各素材と製作技法の特徴を分析し、復元した結果を今後の馬具研究史に新しい視点を提供することで、これからの馬具研究史の中で新しい視点として加えることができたらと願う。

大和鞍の起源とアジア木製鞍の関係

古墳時代に大和鞍発達の過程においては、中央ユーラシアの遊牧民族の木製鞍がその起源と考えられ、中国の魏晋南北朝時代「安陽孝民屯」と「遼寧朝陽袁台子」の古墳から出土した前輪・後輪垂直型の木製鞍と吉林集安の高句麗古墳から出土した銅金具鞍などのアジア大陸系の鞍を強く影響を受け、江戸時代末期までに日本の文化、独特な美意識及び工芸技術などが複合して独自の鞍に変化したと考えてよい。アジア大陸の鞍は西洋の革鞍に対して木製鞍が多くみられるという傾向がある。しかし、同じ木製鞍でも鞍の構造と形式には、気候環境、文化歴史及び当時の技術、鞍の用途・意匠などの差異により、アジア大陸各地域においても特有の鞍構造と形式が誕生した。台湾は自然環境を考えると、本来馬の繁殖生存環境として不適合であった。また外部からの人間による支配が繰り返されたため、馬の生息数や用途などは各時期の殖民支配者により、変化していくことになった。台湾は大和鞍のように長年にわたって外来の文化を融合し、自分の鞍形式を発展し、育むことはできなかった。

大和鞍の概要

古代：古墳時代から平安前期までに古代鞍は戦争に用いられるより権力や武力の象徴であったことであり、豪華な意匠が示している。奈良時代には日本鞍の独特な構造を発達し、正倉院に納めた素木造りの鞍は古代鞍形式の代表的な作例といえる。平安時代からに、武士階級の地位が上がって、鞍は元々神仏や公家などへの献上品から一転して武士の権力を示したものとなっている。

中世：古代鞍と中世鞍の変化は平安時代後期と考えられ、この二つにははっきりと差異が見られる。平安時代後期に入ると鞍橋の構造は、古代鞍の形と全く異なって、新しい鞍が出現する。この時に、日本鞍独自の構造は発展を始めた。

近世：近世鞍の構造には、中世と大きな差異がない。しかし、その後太平の世をむかえ、軍陣鞍のかわりに略装の時に使われている軽快な水干鞍多くみられるようになり、中世よりもっと高い加飾技術と独創的な意匠が生まれ、各々の武将の好みに応じたさまざまな新たな意匠のものが作られるようになった。

東京藝術大学大学院所蔵「大和鞍」の修復

螺鈿鞍は日本鞍の流れにおいて優品が残り、その螺鈿技法は日本の漆工芸技術を述べる際参照されることが多い。東京藝術大学大学美術館所蔵「大和鞍（別名：青貝入和鞍骨）」一背の保存修復を行い、素地構造、下地、塗り、加飾の技法や材料、修復工程を記録した。

馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」の模作

馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」の模作を行い、両輪と居木の美しい曲面構造の素地、漆塗、装飾、四緒手、紐での組み上げといった水干鞍全体の技法を理解することを目的とした。原物の実見調査及び文献調査から、当時使用されていたと推測される同じ材料、技法を可能な限り使用して、復元作業を行った。制作工程について記述する。

結論

本稿では、まず武具と馬具の軌跡をたどり、その後、江戸時代以降の武器・馬具に関する有職故実の研究文献を中心に水干鞍に関する論究を行った。水干鞍に関してはその製作工程を振り返り、軍陣鞍から水干鞍に移行する時期の資料を調査し、鞍の緒の縛り方と日本独自の鞍の伝統技法の調査も行い、日本独特の漆の加飾技術や鞍の意匠の変遷を調査し、それらの時代別の比較や特徴づけを試みた。

大和鞍は修理時に解体したことで、組んだままで分からなかった両輪の切先を隠れていた居木先の形態が明らかとなり、また、本作品では簡易な組み上げに得られて付いたが、紐と通し穴の配置を確認することができた。このことで復元に馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」の模造する工程については大変役に立ったということである。今後の水干鞍研究につなげることとする。

江戸時代以降の武器・馬具に関する有職故実の研究文献に記載されている鞍の型紙、拓本、結び図などを検証して、鞍の素地制作、江戸時代の漆加飾技法、鞍の組立方法や結びの工程と手順を実験・実践し、理論的且つ実証的に鞍制作の伝統技法を解明した。現存する作品の研究調査及び歴史的な文献調査を通じて、可能な限り当時使用されていたと推測されるものに現時点で再現可能な製作技術や素材を用い、水干鞍を再現制作した。馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」の再現制作により、江戸時代の水干鞍の木地制作、また鞍の歴史文献に関する考察を行い、近世の鞍と漆加飾意匠との独創性、鞍の組みにおける結ぶ技法の進化など新たな知見が得られた。

日本鞍に伝わった技術の一つとして水干鞍があることから、江戸時代に日本全国の鞍生産地と現存している水干鞍と共に日本鞍と江戸時代の歴史の関連性に関して論じられる部分であると考え、今後水干鞍についての更なる研究が重ねられ、これが日本鞍に関する歴史の中で重要な位置を占めるとの認識において、さらなる理解も周知させた、次に続く研究に続けたいと願っている。

（論文審査結果の要旨）

概論

本論文は、今まであまり研究してこられなかった江戸時代の水干鞍について、前半はアジアのいくつかの民族の鞍の歴史および日本の鞍の時代の変遷も含めて美術史的にみた鞍の歴史についてたどり、後半は「東京藝術大学美術館蔵『大和鞍』の修復を行った過程と、馬の博物館蔵『烏彫木漆塗鞍』の模造を制作した過程をどちらも写真も交えて詳細に論述した、先駆的且つ独創性のある論文である。

評価すべき点

前半の鞍の歴史をたどった個所については、本人が台湾籍で言葉のハンディキャップがありながら、日本の武具や馬具に関して古い文献にあたり、時代別にていねいにたどっている。また、日本をアジアの一国と捉え、アジアの様々な木製鞍について紹介・論述した個所は非常に興味深い。

修復については、修復前は全体に汚れや埃が付着し、漆塗膜と螺鈿に経年劣化があり、前輪・後輪と居木の組上げはオリジナルの状態ではなく、おそらく後年の組み直しがあった。したがって、保存修復の基本に

立ち、修復すべき点と、そのままにしておくべき点を最初に明らかにし、所蔵先の東京藝術大学大学美術館とも協議のうえ、将来的には展覧会での展示にも耐えうる修復を行ったといえる過程をわかりやすく順を追って論述している。

模造については、当時使用されていたと推測されうる同じ材料、技法を可能な限り使用して復元を行い、漆の工程だけではなく、前輪の形を削り出す過程など、非情に興味深い写真図版が多く含まれる。鞍に関して保存修復の今後の研究に一石を投じた貴重な研究である。

結論

図版の掲載の仕方などに工夫をしなければならない点はあるものの、修復、模倣の技術的な研究は特に興味深く、また、前半の歴史的部分もアジアの木製鞍という観点から江戸時代の水干鞍をみた点が非常に独創的である。また、論文と作品＝「修復と模造」がうまく融合してバランスよく全体で質の高い論文となった。

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程学位論文の合格要件を満たす論文である。

(作品審査結果の要旨)

葉翠馨は、日本の木製鞍の四枚の組み木で出来た優雅な曲線の造形物に惹かれ修理、模作、論文の三面から研究に取り組んだ。台湾出身であるため日本語の壁があったが日本の鞍の古い文献を調べ、アジア各地、日本の鞍の形式、種類を研究し時代の流れをわかりやすくまとめ、水干鞍の装飾表現ではたいへん興味深い。それぞれの時代に特徴ある漆芸表現、意匠で代表されるものである。

東京藝術大学大学美術館所蔵「大和鞍」の修理においては現代の意匠を思わせる綺麗にまとめられた幾何学文様の青貝の鞍である。剥落した青貝と剥落欠損部との照合に時間を費やし、剥落片は元の位置に戻し、しんばり台、しんばり棒を自作し、剥離部分の貝はしっかり圧着されている。また鞍全体のクリーニングがされ、損傷部分の補強の為に麦漆を含浸し、修理方法として現状維持を基本理念に全体はとても良い状態に修理されている。

模作の「烏彫木漆塗鞍」においてはまず、素地の選択について熟慮された選択がなされている。鞍の木取りは独特で二股部の曲り材を使用する。文献、資料からの研究により素地の選別も問題ない。前輪、後輪部はケヤキ材の曲り材から削り出し、微細な曲面、厚み等研究して模作り、本品の銀平目地と烏の構成がとても斬新な例である。烏は「錆上げ黒蒔絵」と言った方が漆芸表現の用語としてわかりやすいであろう。高肉の錆上げからの成形も本品のイメージどおりである。

最終組み立ての結縛法においては鞍の結びの実例を研究し、成果として結びの再現をし、完成に至っている。縛りによる密着感、強度等から麻布結縛法を選択したことも妥当なところである。研究論文だけでなく、修理、模作の実制作の研究をし、完成に至ったことは評価に値する。

(総合審査結果の要旨)

台湾出身でありながら、博士課程の研究テーマを日本様式の木製鞍にし、日本人の先攻研究でも余り明らかにされていない分野に取り組み、あらゆる文献、作品資料を解明しながら、修復研究、模作研究を通して論文として昇華してきた事は高く評価できる点である。

現在日本の中でも木製の鞍は歴史の中に忘れ去られた物であり、多くの人の興味を引く物ではないが、今回の葉氏の調査研究がきっかけとなり、日本において独自に発展をした、水干鞍の構造体としての造形的な美しさは、見直される物である。そして銀の平目粉の上に高上げの黒漆で表現された大胆な烏の模様は、見る物をはっとさせる藝術感度を持ち合わせている。この銀と黒の輝くレリーフの烏という色彩対比は、とにかく美しい。江戸期の日本の意匠である浮世絵の主題の拡大と縮小を三次元に表した作品である。

この模作品の製作の中で部材を結ぶ結び方に付いては、多くの資料の中で、類推を繰り返し、今はきちんと伝えられていない結びを再現した事は、実に有意義な発表である。

また保存修復の研究に当たった東京藝術大学美術館所蔵「大和鞍」は、全面に四角形と三角形の青貝が幾何学的に貼られた鞍であり、この意匠は時代を超えて通用する現代性を秘めている。製作当時に漆面に膠で

貼られた青貝は、触るとはがれてしまう状態であったが、何回かのクリーニングを経て、再び膠にて浮きや、はがれの青貝を接着し、今後の保管、展示に耐えられる様にした修復技術は高く評価される。

今回の提出物と口頭による審査を経て、指導教員5人が満場一致で東京藝術大学の博士の学位に充当するとの評価とした次第である。